

# ピーター・L・バーガーにおける「宗教的ミドルポジション」の可能性と意義

渡辺 頼陽

## はじめに

1960年代に盛んであった世俗化論は、近年の世界的な「宗教復興」とも評される諸現象により困難となって来ているといえよう。ただ「復興」という語が示すように、一時は「世界的」に宗教の衰退が信憑性をもつ状況が存在したのも確かなのであり、現代社会における宗教の位置や役割は決して自明のものではない。この状況の中、衰滅か不変か、といった極端な見解を避けつつ大掴みに現代社会と宗教の関係をモデルとして論じることは宗教社会学というディシプリンにおいて重要であろう。

そうした努力を継続している研究者にピーター・L・バーガーがいる。彼は1950年代中頃から神学や社会学の論文を発表し始め、当時のアメリカ社会と宗教の関係を論じ、宗教社会学者として世俗化を主張しながら一方で信仰者として社会学的分析に基づく信仰の可能性を論じた。

バーガーの世俗化論が、その宗教理論と共に体系化され論じられたのが *Sacred Canopy* 『聖なる天蓋』(1967) (以下、SCと表記する) であるが、実はその2年後の著作から自身の世俗化論への疑義が示され始めており、1971年には、その世俗化論は大幅に見直されたのである。以降、バーガーは近代化によりもたらされた「多元性 plurality」に性格付けられた現代社会の「多元的状況 pluralistic situation」における宗教の社会的変動を論じるようになる。

本論文の目的の一つは、バーガーの現代社会と宗教についての分析の変遷を論じることである。その世俗化論の変遷と、その評価についてはスティーブ・ブルースの研究があり (Bruce 2001)<sup>(1)</sup>、世俗化論の見直しの時期については山中弘の研究 (山中 2004) がある<sup>(2)</sup>。本論はこれら先行研究を踏まえながら、バーガーの現代宗教論の何が見直され、代わりに何が主張されるようになったのかを論じるものである。

そしてバーガーは世俗化論の見直し以降も、現代社会における宗教の変化を論じながら、宗教の持つ可能性についての考察を続けて来っており、現代社会のもたらす〈不確かさ〉と宗教と道徳の関係と共に「宗教的ミドルポジション」という立場の可能性を論じている。これを取り上げ、その可能性を論じるのが本論文の二つ目の目的である。

この議論で、バーガーは現代社会と宗教の関係を見直すヒントとしてプロテスタント神学のアイデアを論じるが、バーガーの宗教社会学とその神学の関連性を説く先行研究は多く無い<sup>(3)</sup>。本論文はバーガーの宗教社会学と神学の関連の一例を挙げ論じるものである。ただ、バーガー神学を包括的に論じることを目的としていないので、その記述は最小限のものとなることを予め述べておかねばならない。

また、バーガーの説く「宗教的ミドルポジション」の議論は、いわゆる市民宗教論や公共宗教論と関わるものでもあろう。これについても最後に論じる。

## 1 バーガーによる現代社会と宗教についての分析の変遷

### 1-1 バーガー世俗化論とは何であったのか

バーガーの世俗化論が最も体系づけられたのはSCである。世俗化とは、現代社会において合理性や科学主義が人々の社会生活における全ての〈確かさ〉を最終的に正当化するものとなる一方で、前近代の社会でそれを担ってきた宗教や呪術の制度／シンボルが、その「信憑構造」を喪失し正当化の任を解かれてゆく歴史のプロセスであるとされた (Berger 1967: 107)。

バーガーの考える宗教とは何か。バーガーによれば宗教はカオスに脅かされる日常世界のノモスを、神聖な<sup>(4)</sup>儀礼によってコスモス化するものである (Berger 1967: 25)。また個人にとっては、死といった限界状況を前にアノミーに陥るものに意味をもたらすのが宗教である。ただ、その世俗化論においては、宗教以外の日常世界の正当化、特に現代では科学などによる世俗のコスモス化こそが重要とされた (Berger 1967: 27)。

先述のようにバーガーは世俗化を歴史のプロセスとして説いた。世俗化の有力な源は「拡大する産業資本主義」 (Berger 1967: 108) であり、ウェーバーが西欧近代資本主義の発展とプロテスタンティズムの相互的関連を説いたことを参考にしながら、古代イスラエルの宗教が世俗化のルーツとされたのである (Berger 1967: 113-120)。そして産業資本主義がグローバルに広まるにつれ、世俗化も程度の違いこそあれ広まってゆくとバーガーは考えたのであった (Berger 1967: 171)。

さらにその世俗化は社会における諸制度のみならず、人々の主観へも影響する (Berger 1967: 108)。世俗化は、現実についての伝統宗教による定義の信憑性の崩壊をもたらし、「多元主義」<sup>(5)</sup>の現象を招来するのである (Berger 1967: 127)。「多元主義」「多元的状況」とは、日常生活の包括的な意味の制度的秩序付けを巡る競争が存在する状況であり (Berger and Luckmann 1966: 73)、これも近代になって初めて生じた歴史的なプロセスである。「多元主義」「多元的状況」の影響により、宗教による「信憑構造」の維持や新たな創造は困難となる。また、その状況の中で宗教は私的好みにより選択され、それぞれが説く〈真理〉は相対化される。以上が、バーガーの説く世俗化論である。

### 1-2 世俗化論の見直し

先述のように、バーガーの世俗化論の見直しはSCの発表後すぐに始まっている。SCの2年後に発表された*A Rumor of Angels*では、制度的な世俗化や伝統的教会の衰退に伴い進行するはずであった人々の意識の世俗化が確認できないこと (Berger 1969: 4)、世俗化プロセスが包括的なプロセスでは無い可能性 (Berger 1969: 26) が述べられている。

そして1971年の論文で、バーガーはその世俗化論の見直しを表明する。この論文でバーガーは自身の世俗化論でも、①「現代人の世俗化した意識」というものが西欧近代に広まりシェアされていること、②この意識が伝統的な宗教的世界観を排除するということ、③その意識が肯定的に評価されるべきこと、が前提とされていたことを述べ (Berger [1971] 1977: 187)、これらの前

提が現代人の世俗化した意識についての特殊視や誇張に基づいているため、意識の世俗化の進歩性と不可逆性は疑わしいと指摘している (Berger [1971] 1977 : 187)。

また、その論が宗教と現代社会の関係を広く論じるものでありながら、西洋＝キリスト教中心主義的であり過ぎたことも反省され、その見直しが第三世界の宗教の依然として大きい社会的影響力や、北米や旧ソ連といった第三世界以外の地域での宗教復興運動の発生といった経験的な証拠の圧力によるものであることが強調されたのである (Berger 1979 : x)。

以上のような反省を経てバーガーの世俗化論は見直されたが、ではバーガーが現代社会と宗教の关系到何ら特別なものが無いと論じたのかということそうではない。前述の論文では、当時のアメリカ社会における力強い宗教的衝動の復活が言及され、そこにバーガーは「様々な人びとの宗教的な回答に対する、広範で、おそらく根深い渴望」(Berger [1971] 1977 : 190) を見出している。近代化が〈古い確信〉を揺るがしたことにより、社会的な信念や諸価値が危機に陥る「脱道徳化 demoralization」が起きており、その動向によっては世俗化論を反証するような伝統宗教制度の復活や、反世俗主義的宗教運動の発生もありうるとバーガーは予測している (Berger [1971] 1977 : 191)。

### 1 - 3 世俗化論以降の宗教—社会論

この節ではバーガーが世俗化の前提を見直して以降、現代社会と宗教の関係をどのように論じるようになったのかを述べてゆく。

まず SC などで示された、世俗化を〈主〉とし、「多元化」を〈従〉とするような構成が見直された。それは世俗化が歴史的プロセスであるとの前提によっていたのであるが、その見直しに伴い、近代化プロセスの結果生じた現代社会の最も重要な特徴の一つとして、まず多元化が挙げられ、その文脈において世俗化が語られるようになる。つまり、先程の表記に準じて示せば、多元化を〈主〉とし、世俗化を〈従〉とするような議論がなされてゆくこととなる。

1979年の著作でバーガーは現代社会が人々に強いる要素として「選択肢の多様化」「宿命 fate から選択への移行」を挙げ (Berger 1979 : 11)、前近代人が宿命の世界に生きていたのに対し、現代人が自明性の低い世界を生きる存在であることを論じている (Berger 1979 : 13)。また、そうした社会の宗教は、その「信憑構造」の多元化により客観的な〈確かさ〉を提供する能力を減じ、個々人の主観の問題とされるのである (Berger 1979 : 11)。現代人の宗教信仰は、主観的な反省に基づく選択から始まる、従来正統を自任してきた諸宗教権威が説く〈真理〉とは異なる「異端 heresy」的なものとならざるをえないのである (Berger 1979 : 30)。

これだけを見れば、世俗化の語を多元化に置き換えただけ、といった印象を与えるかもしれないが、そうではない。多元化した現代社会において、主観的な信仰の対象として宗教は在らざるを得ないが、一方では、そうした社会であるために〈確かさ〉をもたらす宗教に対する人々の要求が高まる可能性があることも説かれるのである。

バーガーは現代社会のあらゆる領域における〈確かさ〉の動揺を強調する。そして、その〈確かさ〉の動揺が宗教制度や宗教的信念の重要性の低下に必ずしもつながらないことを論じる。1992年の著書 *Far Glory* (以下、FG と表記する) では、近代化の進む様々な地域での宗教復興運動が分析され、近代化と宗教の関係が「近代化 = 多元化 = 世俗化」といった単純なものでは

なく複雑であることが述べられる。〈脱魔術化〉した世界は人びとに〈不確かさ〉をもたらし、それが冷たく居心地が悪いので、現実の中に再び世俗性を超えるような超越を見出そうとする人々による宗教復興運動が生じうるのである (Berger 1992 : 29-30)。

バーガーは、宗教復興運動が近代化や多元化や世俗化への反応として発生している点を強調し、近代主義と反近代主義、多元主義と反多元主義、世俗化と反世俗化といったそれぞれに関わる諸力間の相互的な関係により、現代社会における宗教の役割や位置は変化すると述べる。ここからは世俗化論見直し以降のバーガーの宗教社会論から、近代化、世俗化、多元化の概念の結びつきの自明視や、それぞれの不可逆性や不変性が除かれようとしていることが確認されるであろう。いわゆる西洋近代的な社会制度が多元化する傾向を持つことは依然としてその論の前提とされるが、それ以外はそれぞれの文化におけるバリエーションがありうるということが説かれる。バーガーは世俗化というアイデアをナイーヴに拡大解釈してきたことを反省した上で、なお西欧世界とキリスト教の歴史において生じたそのアイデアを単純には放棄しない。FG以降も「ヨーロッパ例外主義」(Berger 2001 : 446)「ユーロ世俗性」(Berger 2010 : 116)といった概念を用いて世俗化現象を問い続けている。

## 2 現代社会の「多元的状况」における世俗主義と宗教

### 2-1 「多元的状况」と〈確かさ〉の問題

世俗化論を見直して以降のバーガーの宗教社会論において、現代社会はあらゆる〈確かさ〉が動揺させられている社会として論じられる。現代社会の多元化の特徴としてバーガーは、未曾有の規模での都市化を挙げ、それに資本主義による市場の普遍化、民主主義政治による政治的レベルでの寛容の制度化といった要素が加わることで、その多元化の傾向が著しくなり、「多元的状况」が訪れることを指摘する (Berger 1992 : 39)。

ここで注意が必要であるのは、バーガーが多元化や「多元的状况」を現代社会特有の現象であると論じなくなったことである。バーガーは最初期のキリスト教徒たちが様々な異なる信仰集団の中でキリスト教会を形成したことを述べ、「現代社会はヘレニズムの社会と、競合する信念と価値があり、世界観が一つでないという多元主義の競合する要素を共有する」(Berger 1992 : 9)ことを述べている。

では、現代の「多元的状况」における固有の特徴は何であろうか。これは幾つかの要素の組み合わせから説明されている。一つは都市化におけるその規模の大きさである。これには資本主義体制による市場の普遍化や、科学や技術の進展といった要素が関係する。都市化は、様々な他者との出会いによる「認知的感染」を招く場を提供する。異質な諸世界観との出会いを通じて、人々の自明としてきたそれまでの世界観は互いに相対化されて行く。都市において人々は「伝統的」世界観から自由になるが、時にそれは孤独として感じられるものともなる (Berger 1992 : 87)。

二つには現代社会の「多元主義」の性格である。バーガーは、現代の「多元主義」を「ある社会における異なる諸グループの市民的平和を伴う共存」(Berger 1992 : 37)の状況を意味すると定義している。前近代社会においても「多元的状况」は存在したが、「認知的感染」が生じる機会を減らすべく身分制度による住み分けや暴力などによる隔離といった〈フェンス〉が存在して

いたのに対し、現代の「多元主義」は単に殺し合いをしないという意味以上の共存を意味し、〈フェンス〉の無い社会的相互作用を意味しており、そこでは異なるライフスタイル・価値観・信念が混ざってゆくこととなる（Berger 1992: 38）。これには、民主主義政治による政治的レベルでの寛容の制度化といった要素が関係するのである<sup>(6)</sup>。

こうした事情から現代社会では、人々は社会の全ての領域において確信を持つことが困難となり、仮に確信を得たとしてもそれは多くの選択肢の中の一意見として相対化されざるを得ないのである。〈確かさ〉の動揺はあらゆる領域に及ぶのであり、そこには社会的規範も含まれる。道徳的不安から、その〈確かさ〉を広く提供してきた能力を見込まれて宗教的正当化への要求が現代社会において高まるという現象が生じていることを、バーガーはアメリカにおけるキリスト教「原理主義 fundamentalism」運動などを例として挙げながら論じている（Berger 1992: 193）。また、一方で現代社会の「多元的状况」に過剰に適応し、〈真理〉の追究を放棄させる「相対主義 relativism」の立場も取り上げ、「原理主義」「相対主義」が共に現代社会の「多元的状况」からもたらされる不安への極端な立場を導く問題含みのイデオロギーであることが説かれるのである。

本論文にとり大切なのは、こうした極端な立場を導くイデオロギーに対抗するミドルポジションを宗教からも提供できるのではないかというバーガーの議論である。それについては第3章以降に論じてゆくが、さしあたり本章の以下の部分では「相対主義」と「原理主義」に関するバーガーの議論を確認しておこう。

## 2-2 「相対主義」と〈真理〉の問題

バーガーは、現代社会における〈確かさ〉の動揺が人々をして2つの極端な立場に向かわせる傾向を持つこと、そしてそれぞれに問題があることを指摘した。その一方の極とされるイデオロギーが「相対主義」である。この節では「相対主義」がどのようなイデオロギーで、どのような問題を持つとされているのかを確認したい。

まずバーガーのいう「相対主義」は、現代社会の「多元的状况」で生じる〈確かさ〉が相対化されるプロセスを歓迎するイデオロギーであり（Berger and Zijderfeld 2010: 49）、際限のない寛容という性格を持つと定義される（Berger 1992: 46）。そして、「相対主義」を信奉するものは、〈真理〉や客観的に確認可能な〈事実〉といった概念を否定し、あらゆる価値が等価であるかのように主張するのである。ただ、社会における道徳といった領域を考えれば、どのような社会にも受け入れ可能な価値と不可能な価値の境界が存在するのであり、それを無視するようなイデオロギーは、〈真理〉への到達を困難かつ無意味であるとして放棄させるような主張につながり得ることをバーガーは指摘している（Berger and Zijderfeld 2010: 52）。

そしてバーガーは「相対主義」的な見解の系譜が古くから存在すると述べ、近年ではニーチェやマルクスやフロイトによる西洋的自我やアイデアに対する相対化の影響力が大きかったこと、現代においてはポストモダン理論（その論者としてフーコーやデリダ、ローティの名が挙げられている）が「相対主義的」伝統のラディカルな再主張を行ったと論じている（Berger and Zijderfeld 2010: 52-55）。

そうしたポストモダン理論に共通する要素としてバーガーは、①〈知識〉〈客観性〉〈真理〉の

妥当性の判断への断念、②啓蒙主義的伝統の拒絶、を挙げた上で、古今の「相対主義者」共通の理論的問題を述べるのである。それは「相対主義者」がいつも自身を〈真実〉の唯一の監督者である「認識的エリート」の位置に棚上げし、自身の思想に関しては相対化や脱構築を避けているという問題である（Berger and Zijderfeld 2010 : 57）。その意味で「相対主義」を信奉するものは虚偽意識を抱えているといえるのである。バーガーは、彼らのいう〈真理〉の確認の困難さは誇張に過ぎず、世界には〈事実〉が存在し、その探求における〈客観性〉も可能であることを、身体的リアリティや、デュルケムによる社会論や、シュッツの日常世界における「自明の経験」といった概念を紹介しながら主張している（Berger and Zijderfeld 2010 : 63）。

以上が、バーガーの論じる「相対主義」と、その問題であるが、それが問題であるのは学問的な文脈における認識論的な無効性だけではない。むしろ重要なのは現代の「相対主義」の出現が、そうした理論傾向を下支えする様な、現代社会における「多元性」の経験の拡大の結果であることなのである（Berger and Zijderfeld 2010 : 67）。バーガーはデュルケムを引用しながら社会が共通の価値なしに統合されえないことを述べ、現代社会における「相対主義」が、モラルティを相対化し、政治的ニヒリズムやデカダンスを招きかねない危険を主張するのである（Berger and Zijderfeld 2010 : 68）。

### 2-3 「原理主義」と〈誤謬〉の問題

この節では、バーガーが現代社会において生じる極端な2つのイデオロギーとして論じた、もう一方の極である「原理主義」について述べてゆく。

バーガーは「原理主義 fundamentalism」という語が、歴史的に見て現在不適切に使われていることを指摘した上で（Berger and Zijderfeld 2010 : 71）、今日、慣習的に使われている「原理主義」についての定義を行う。バーガーは「原理主義」の3つの性格を論じる。

1つ目は「原理主義」が〈反応的な現象〉であることで、例えばアメリカの「原理主義」運動は一時的なモダニティへの反応であるといえる（Berger and Zijderfeld 2010 : 71）。2つ目は「原理主義」が何を主張し運動しても、それはあくまで〈現代的現象〉であるということである。これにはバーガーの自明性を巡る考察が関わっている。「原理主義」により選択され主張される伝統は、その自明性の性格を失っており認識的に不安定である。そのため「原理主義」の立場に立つものは、その〈確かさ〉を脅かす存在に対し、伝統主義が示し得るはずの寛容を示すことが出来ないのである（Berger and Zijderfeld 2010 : 72）。3つ目は「原理主義」が伝統の自明性を回復する試みであり、典型的には〈本来の伝統〉への回帰を主張することである（Berger and Zijderfeld 2010 : 73）。ただ先述の通り、「原理主義」の想定する〈本来の伝統〉は自明性を失っており、その信奉者は、認識的〈誤謬〉に基づく不安定な〈確かさ〉を常に守るべくアグレッシブな確信を自他に示さねばならず、その信条を自らが選択したこと、また別のものを選択しうることを常に抑圧し続けねばならない弱さを抱えているのである。

またバーガーは「相対主義」と「原理主義」が実は表裏の関係にあることも指摘している。それらは共通して現代的現象であり、現代社会の多元化、相対化する性格への〈反応〉である。そして両者ともに〈絶対的な真理〉を待望する点でも共通した性格を持つのである（Berger and Zijderfeld 2010 : 73）。

こうした性格を持つ「原理主義」であるが、現代社会におけるその出現のもたらす危険は何であろうか。「原理主義」は、先述の性格からそのイデオロギーを共有するものに対して、〈回心〉以前の過去や、現在の〈外部〉とのコミュニケーションの無価値さを説き、〈疑い〉を持つことを禁止するのである（Berger and Zijderfeld 2010：82-83）。「原理主義」は様々な形態で、その不安定な〈確かさ〉を、往々にしてラディカルな態度で維持しようとするが、いずれも選択等の自由を放棄し、他者との対話を拒むことから紛争を招くのであり、結果、〈集合的良心〉や社会の結束を弱めるのである（Berger and Zijderfeld 2010：86）。

以上が、バーガーの論じる現代社会で生じがちなイデオロギーの双極であり、それぞれが〈確かさ〉の地道な探求や、それに伴う他者との対話を放棄し、〈絶対的な真理（または真理など無いという絶対的真理）〉へ飛躍する傾向を持っている。バーガーは、「相対主義」の立場を行き過ぎた〈疑い〉という性格で、「原理主義」の立場を〈疑い〉の欠損という性格で描いている。（Berger and Zijderfeld 2010：87）現代社会における、こうした〈疑い過ぎる〉〈信じ過ぎる〉両極の間で、いかにして程よい〈確かさ〉と〈疑い〉が可能な地点を見出せるか、そこに宗教がどう貢献できるかを論じることがバーガーの近年の宗教—社会論のテーマの一つである。

### 3 「宗教的ミドルポジション」の可能性の探求

#### 3-1 「宗教的ミドルポジション」の意味

前章では、バーガーが現代社会の道德等を含む全ての領域での〈確かさ〉の動揺に際して2種類の極端なイデオロギーが生じていると分析したことを紹介した。バーガーは、この道德的な動揺に対して「宗教的なミドルポジション」の可能性を論じるのである。彼がそもそも宗教と道德の関係はどう見るのか、なぜ「宗教的ミドルポジション」を主張するのかについて、この節では述べてゆく。

まずバーガー宗教—社会論における宗教と道德の関係は両義的である。バーガーにとり宗教経験こそが宗教の本質であることは、その研究史上一貫しており、その経験は、非日常的で、聖なる性格を持つエクスタシー的な経験であり、「自明の世界」の道德などを動揺させる面を持つのである。ただ、もう一方で宗教的経験は〈至上の現実〉を破壊するだけではなく、むしろ〈限定された意味の領域〉を構築する性格を持つとも評価されるのである（Berger 1974：130）。また、宗教経験を〈飼い馴らし〉保存する宗教組織は、社会規範をより広い意味において正当化することも評価される（Berger 1974：132）。

FGにおいてバーガーは、現代社会に宗教への道德的ガイダンスとしての広範な期待が存在することに触れながら（Berger 1992：192）、宗教的経験の性格から両者が単純に同一視出来ないことを述べている。宗教が世界のあらゆるリアリティの本質を定義する性格を持つために宗教と道德の関わり合いは存在し、歴史的にはあらゆる社会の道德システムが宗教的用語で正当化されて来たのだが、それは必ずしも今日、自然法として理解されている特定の法的なコードや道德律と宗教が同一であることを意味しないのである（Berger 1992：196）。

現代の多元的状况における道德等の〈確かさ〉の動揺を問題視し、その解決に宗教が貢献しうることを論じる研究者としてロバート・N・ベラーの議論が挙げられるが、この点で両者の議論

は異なる。現代アメリカ社会の呈する多元的状况の再統合のために、ベラーは市民宗教の再生を訴えたが (Bellah 1967=1973 : 366)、バーガーの立場からすればアメリカ社会における道德規範や法とプロテスタント的伝統の関わりが歴史的に明らかであったとしても、それが多元化した現代社会において一元的なものとして再現されねばならない理由は無いと言えよう。また、両者の違いにはその宗教の定義の問題も関わる。ベラーは市民宗教を論じるに際し、全ての集団が宗教的次元を有するという前提に立つ機能的定義を採用しているが (Bellah 1967=1973 : 372)、それに対してバーガーは先述のように宗教における特異な性格として非日常的な経験やエクスタシー等をこそ重視するのであり、社会的集団統合の機能だけで宗教を論じない。宗教は世俗的な集団統合における道德規範や「伝統」を正当化しもするが、時にはそれを問い直しもするのである。以上、述べてきたように、バーガー宗教—社会論において宗教と道德は本質的な関連を持たないが、ではなぜ道德的動揺に対して「宗教的ミドルポジション」の重要性が説かれねばならないのであろうか。

1つ目の理由は、宗教と道德の歴史的な関与から、現代社会の道德の自明性が揺らいだ時に宗教への期待が高まるという事情があり、その極端な反応として宗教的内容を持つ「原理主義」運動が今日生じているためである。そのため、「宗教的ミドルポジション」を探求することは、破壊的な宗教的「原理主義」に対する防御のために政治的にも重要なのである (Berger 2010 : 13)。

またバーガーは、「宗教的ミドルポジション」を考えることは、知的にもスピリチュアルな意味でも現代社会において重要であると述べ、そうした場を考えることで、近代から〈移住〉せずに宗教信仰者となることが可能であると (Berger 2010 : 13)、言い換えれば「宗教的<sup>イコール</sup> = 反近代的」という軛から脱することが出来ると主張している。バーガーは、人権などの現代思想のルーツは様々な伝統的・人類学的なアイデアに存在してきたとする見解に立ち、それが明白に正当化されて来ていることを評価している (Berger 2010 : 13)。

2つ目の理由は、現代社会の「多元的状况」で動揺していることは、宗教的〈確かさ〉にも、道德的〈確かさ〉にも共通しているのだが、実はそのどちらにも〈信じる〉という行為や、それを導く経験が重要であるというバーガーの見解に関係する (Berger 1992 : 201)。つまり、近代化や近代主義のもたらす「多元化」や「相対化」に対して、極端な立場を避けながら〈確かさ〉を探求・確保しようと努めてきた宗教的取り組みは、現代社会における道德的〈確かさ〉の探求の方法にも役立つのではないか、というのがバーガーの主張である。

本論文では詳細に述べられないが、バーガーは自身の神学的研究において、近代化のもたらす様々な効果に迎合的な態度でやり過ごそうとする「自由主義神学」と、それを無視し〈伝統〉を偽装する「新正統主義神学」の〈中間〉に、「超越のシグナル」を構成する「原型的人間の身ぶり prototypical human gestures」 (Berger 1969 : 53) を重視しながら、同時に様々な宗教伝統に蓄積された宗教経験をも超宗派的に利用する神学の可能性 (Berger 1979 : 62) を探求し、現代社会における望ましい信仰を論じている。こうした取り組みが、新たな道德的〈確かさ〉の基となる経験と、それに対する極端でない信念を現代の人々が得ることに資するとバーガーは論じているのである。

ただ、バーガーは「宗教的ミドルポジション」を考えてみるのが、即ち現代社会における道德的動揺の原因を解消すると主張しているわけではない (Berger 1992 : 211)。また、宗教的〈確

かさ)の動揺と道徳的〈確かさ〉の動揺に共通点はあっても、ある道徳的経験のもたらす〈確かさ〉を〈信じる〉ということと、宗教的経験のもたらす〈確かさ〉を〈信仰する〉ことは異なるとも述べている(Berger 1992: 201)。以上のことから、バーガーが宗教と道徳のナイーヴな混同を避けながらも、その両者の関連において有意義な主張をしようとしていることが窺えよう。

### 3-2 「宗教的ミドルポジション」と「true believer 真理信奉者<sup>(7)</sup>」

では、バーガーの説く「宗教的ミドルポジション」とは何であろうか。本節では、バーガーの述べる「宗教的ミドルポジション」について、彼の神学的な議論に最低限であるが触れながら論じてゆく。

結論を先取りして述べれば、「宗教的ミドルポジション」という概念の核にあるのは、宗教(宗教経験)のもたらす〈確かさ〉は、その内に信仰も〈疑い〉も共に含むという主張である。

一方、その概念の対極として考えられているもの何か。バーガーは、エリック・ホフファーの著作に触れ、世俗的性格・宗教的性格を問わないあらゆる〈-ism, ~主義〉への「真理信奉者 true believer」の在り様を、①反対の意見やアイデアを聞けず、②反駁不可能な真実を有していると主張し、③その真実が唯一の真実であると主張する人々として描いている(Berger and Zijderfeld 2010: 97)。こうした「真理信奉者」は熱狂的な態度で、真理の独占者を自認し、〈疑い〉のヒントを覆い隠し、自由や穏健といったイメージを冷笑し迫害する存在なのである(Berger and Zijderfeld 2010: 97)。

バーガーは、現代の様々な場所で見られる熱狂的な信仰の在り方と、宗教の信仰が本質的な繋がりを持たない事を、宗教伝統、具体的にはキリスト教プロテスタントの伝統における様々な取り組みを通じて論じてゆく。

なぜプロテスタントの伝統でなければならないのか。バーガーがプロテスタントの伝統に〈疑い〉と信仰の共存のヒントを探ろうとするのには、自身がルター派の信仰を持っているという関係以外にも理由がある。バーガーはウェーバー主義者であることをかねてから表明しており、近代とプロテスタンティズムが特別な関係を築いて来たことを重視している。また近代的学問、特に強調されるのは近代歴史学との関係であるが、それに果敢に取り組んだ19世紀ドイツのプロテスタント神学大学における現代聖書研究を、信仰を保持しようと努めながら、なおかつ他の分野からもたらされる〈真理〉との和解を目指していたものであるとして高く評価している(Berger and Zijderfeld 2010: 115)。こうした理由から、近代のもたらす「多元化」「相対化」効果の影響下で「宗教的ミドルポジション」を探る際には、プロテスタントの伝統が役立つと述べるのである。ただ、そのためにプロテスタントの信者である必要はないと述べられていること(Berger and Zijderfeld 2010: 115)も付記しておかねばならないだろう。

### 3-3 「宗教的ミドルポジション」とバーガーによるプロテスタント神学

ではバーガーがプロテスタントの伝統の中に見出した〈疑い〉と信仰が共存しうる可能性について述べてゆく。バーガーが自身の神学的取り組みにおいて新正統主義神学にも、行き過ぎた自由主義神学にも与せず、その〈中間〉を探求したことは先に触れたとおりであるが、こうした神

学の問題点としてバーガーは〈確かさ〉の問題を論じている (Berger 1979 : 151)。様々な宗教伝統の蓄積や人文科学の成果を参照することは、同時に様々な〈真理〉との出会いを意味し、それは従来のキリスト教的〈確かさ〉を動揺させ、信仰を脅かしかねないのである。

バーガーはこの問題に同じように悩んだ神学者としてエルンスト・トレルチを挙げ、彼の述べた「柔らかい確かさ mellow certainty」というアイデアを紹介する (Berger 1979 : 153)。「柔らかい確かさ」は、自己の確信に疑問が提出された時に、その完全な喪失を意味させず、それが更に広い文脈の中で再び主張されるはずであるとする態度をもたらしものである。バーガーは宗教経験における〈確かさ〉に思想的次元と個人的次元の2種類があり、仮に思想的次元で失敗しても、個人的次元における「柔らかい確かさ」ゆえに、それは信仰の失敗を必ずしも意味しないと論じている (Berger 1979 : 187)。ここでは特に、個人的次元での非日常的で「聖なる」性格を持った宗教経験への〈確かさ〉の実感が重視されていると考えられ、従来のバーガー宗教論が「信憑構造」の大きさで信仰の可否を論じていた観点からすると、その変化は大きなものであると言える。

以上の様な動揺する〈確かさ〉に基づく信仰は、困難だが可能であると主張するために、バーガーは更なるアイデアをプロテスタンティズムの議論の歴史の中に探っていく。

バーガーは、ルターの述べる「信頼としての信仰 faith as trust」が、個人が遭遇する〈不確かさ〉をもたらし非日常的経験を、特別な「聖性」を有する宗教経験であると〈信頼する〉ようになるあり方と近いものであると論じる (Berger 1992 : 134)。これは、自分の出会った非日常的な経験を、ただ存在したものでなく自分のためにこそ存在したと信じるために、諸伝統の中で説かれてきた宗教経験との適合を問いながら探究させるような信仰のあり方である。バーガーによればプロテスタントは宗教的経験のそれまで自明視されていた意味が〈不確か〉であることを受容することに始まった (ルターは当時の教会を問うたし、その解釈によって聖書にも重要な部分とそうでない部分があることを論じた) ので (Berger 1992 : 134)、その意味のさらなる探究を必要としたのであり、最終的にこうした経験を単なる幻でなく、依るべき〈確かさ〉であるとして捉えさせるのは〈信頼〉(ルターであれば、教会等ではなく神のみへの〈信頼〉)であったのである (Berger 1992 : 142)。こうしたアイデアにより、現代人も〈不確かさ〉を抱えながら探求に向かい、〈信頼〉により信仰をうることが出来るとされたのであるが、では「聖性」を巡る探究はいかにしてなされるのであろうか。

バーガーは、様々な非日常的経験に「聖性」を見出す基準としてパウル・ティリッヒの「相関 correlation」の概念を挙げる。このティリッヒによる「相関」概念は知的考察についてのものであるが (Berger 1992 : 152)、バーガーはこれを個人による非日常的経験と「聖性」の発見への道筋として論じる。個人が様々な非日常的経験の中で、どの経験に「聖性」へのつながりを見出だすかは、自己の経験と、その個人を取り巻く伝統的なものも含む環境との「相関」に基づく〈確かさ〉の記憶から判断されるのである (Berger 1992 : 155)。ここでは特定の個人の記憶や実感、存在している具体的な場所が、信仰や信頼のとりあえずの〈確かさ〉を提供するものとして評価されていると言えよう。個人は自己の遭遇した非日常的経験の意味を探究する際に、全くの白紙から始めるのではなく、「聖性」を様々な伝えてきた諸知識の身近なものの中から出発するのである。そしてバーガーは、現代において〈信仰〉するということは、「相関」を通じて得た信仰を持ちながら、様々な他の宗教経験等の示す〈真理〉との比較評価を続けて行くことでもあると論じる

のであるが (Berger 1992 : 155)、ここからは「相対主義」的な〈真理〉への諦念を避けようとする意図がうかがえよう。

さらに、先述のプロテスタント的〈確かさ〉への探求が〈不確かさ〉の受容に始まっているとの主張は、自身による造語「不確かさ係の人々 the uncertainty-wallahs」や、ユダヤ教徒の社会学者であるアダム・セリグマンの主張した「認識論的慎み深さ epistemological modesty」<sup>(8)</sup>といったアイデアの採用によって進められる (Berger 1998 : 783)。前者はバーガーの体験から生まれたアイデアである。「不確かさ係の人々」は、政治的事柄であれ宗教的な事柄であれ、自分の意見を持ちながら同時にそれについての〈不確かさ〉も認める人々であり、バーガーは、より良いコミュニケーションは意見の差異を超えてこうした人々との間にこそ可能ではないかと問うている。後者はセリグマンの造語である。バーガーはこれを懐疑主義と信仰の熟成された統合であり、基本的にはいかなる宗教伝統にもこのアイデアが見いだせると述べる (Berger 1998 : 784)。それは、神のみが正しい答えを有しているとしても、あらゆる人間によるその答えへのアプローチは解釈でしかなく限界があるとするような態度に信仰者を導くのである。バーガーは「現代社会」において〈真理〉を探求する際には、こうした態度や認識によらねば、極端な「相対主義」「原理主義」に陥りがちであると論じる。また〈疑い〉を信仰へと至る準備、無知を知識へと至る準備であると論じたセバスチャン・カスティリヨを評価することで、〈疑い〉を言わば内蔵する信仰の可能性を述べ、〈狂信〉でも〈不信〉でもないミドルポジションの可能性を述べているのである (Berger and Zijderfeld 2010 : 102)。

以上、この節ではバーガーによる神学論の中から、特に「宗教的ミドルポジション」のアイデアに関連する主張のみを取り上げた。そのため、この記述だけではバーガー神学論の全体を把握することは困難であるが、その取り上げた諸概念を見ただけでも宗教経験のもたらす〈確かさ〉を重視しながら絶対視は避けようとする傾向や、信仰という概念の様々なレベルを探ろうとしていることが確認出来るであろう。

では最後に、この「宗教的ミドルポジション」というアイデアの限界について2点指摘したいと思う。バーガーは、このアイデアを現代社会で生じている道徳的対立に関わっている諸宗教集団にとって必要なものとして説いているが、ここではその普及を考えた時、実際に問題となりそうな点に関して指摘してゆく。

最初の点は、この「宗教的ミドルポジション」というアイデアを〈誰が〉必要とするのかという点である。「宗教的ミドルポジション」というアイデアは、現状の「多元主義的状况」を積極的にではなくとも肯定する前提から始まる宗教伝統の解釈に基づくのであり、例えばある社会において組織的にも認識的にもマイノリティである宗教集団が、こうしたアイデアを自発的に取り入れることは考えづらいように思われる。彼らの説く〈真理〉は既に他者の〈疑い〉の目に晒されているのであり、加えて彼ら自身がその〈真理〉に〈疑い〉を向けるならば、その集団の維持は困難となるかもしれない。であるならば「宗教的ミドルポジション」は、ある程度の社会的支持基盤を持ち、何らかの〈真理〉を内包していると見なされる宗教集団において〈確かさ〉や信仰を得たものが、自発的に排他的な〈確信〉を手放すことであると言いうるのである。

2点目は「宗教的ミドルポジション」において推奨される、信仰しながら更なる〈真理〉を追求することと、〈真理〉への〈疑い〉や〈慎み〉を持ち続けることが併存し得るのかという点である。バーガーが推奨する〈疑い〉を内包する信仰は、プロテスタントの伝統で説かれて来た〈真

理〉についての様々な解釈に依るのであるが、その解釈に向かわせる動機は先述のように現代の「多元的状况」への対処の必要性から生じたものであろう。実際、「宗教的ミドルポジション」のアイデアの基となる議論を行ったプロテスタント史上の神学者たちが、常に他の〈真理〉に対して寛容であったとは言い難い (Berger and Zijderfeld 2010 : 114)。宗教において〈真理〉は唯一であるとの信仰こそが、人をしてその探求に向かわせて来たのであるなら、「宗教的ミドルポジション」に立つ〈真理〉への〈疑い〉は、探求への熱を良くも悪くも冷ます可能性を持つであろう。

以上の点から、バーガーの説くこのアイデアがどの程度実践的に有効であるかには疑問がある。しかし多元的な現代社会において、宗教的/世俗的であることを問わず、平和的にある〈真理〉を説き、それを論じることに価値を見るならば、〈真理〉に対し〈確信〉以外の何らかの態度を示しうることを説くこうしたアイデアは無意味では無いだろう。

## おわりに

以上、本論ではバーガーの宗教社会論の変遷を、世俗化論を中心として紹介した後に、現在のバーガーによる現代社会と宗教の関係についての分析と、それに基づく提案について述べてきた。ここで最後に、現代社会における宗教の「復興」と、その果たし得る役割を論じるいくつかの議論と、バーガーの「宗教的ミドルポジション」の議論を比べ論じてみよう。

まず先にも触れたベラーの市民宗教論との比較である。ベラーは人間が社会集団を作る際には必ず宗教的次元が関わることを述べ、その市民宗教論ではアメリカにおける国家や市民社会のコミュニティにおける道徳の形成・維持に、特定の宗派色を排した広い意味でのキリスト教的な神概念等が大いに関わってきたこと、アメリカの市民宗教が国際的な市民宗教の一部となることを目指すべきことが論じられている (Bellah:1967=1973 : 370-371)。バーガーの宗教論とベラーの宗教論における前提が異なることは先述の通りであり、バーガーの現代社会と宗教の関係についての議論では宗教と道徳とアメリカ史の結びつきは自明視されない。バーガーの「宗教的ミドルポジション」の概念は、今日の社会の様々な領域における〈確かさ〉の動揺を社会的現実として論じた上で、人々が「相対主義」や「原理主義」といった極端な選択に振れることを止めるヒントを諸宗教伝統、特にプロテスタントの信仰を論じてきた伝統の中に見出したものである。バーガーの「宗教的ミドルポジション」概念は道徳的動揺の原因をただちに解消するものでないし (Berger 1992 : 211)、壊れてしまった市民宗教の再構築を目指すものでもないのである<sup>(9)</sup>。

では近年の宗教社会学で注目すべき議論を呼んでいる公共宗教論との関わりはどうであろうか。ホセ・カサノヴァの世俗化論についての分析と評価や、現在の宗教運動に脱私事化を目指すものが現れていること (Casanova 1994 : 7) についての両者の見解は近いものであると言える。ただカサノヴァの公共宗教論に見られるキリスト教 (特にカトリック) 的な前提や、例えばユルゲン・ハーバマスが定式化した「討議モデル」の前提とされる様々な境界線を、宗教的「共通善」の主張によって引き直すよう迫る姿勢を評価する見解 (Casanova 1994 : 232-234) において両者は異なるように思われる。バーガーの「宗教的ミドルポジション」の提案は、そうした境界線の存在を直ぐに問題視するのではなく、それにも対応できる潜在的な柔軟性を様々な宗教伝統の解釈の中に見出すことを勧めるのである。

以上、簡単にベラーの市民宗教論、カサノヴァの公共宗教論とバーガーの議論の違いを論じた。彼らの議論と比べて、バーガーの主張に〈強み〉があるとすれば、その「宗教的ミドルポジション」のアイデアが、現在社会において優勢な諸規範を問い直す一方で、現代性への敵対へと傾きがちな規範的立場をも問い直す点であろう。この視点は彼の宗教観に大に関わる。既述のようにバーガーは宗教経験の個人的で非日常的な側面を強調する。この強調により、バーガーは聖俗にまたがるあらゆる既存の制度や規範と相互作用しながらも、そこに一方的に還元されないような「宗教」の独自性を担保しようとしていると言えよう。

#### 注

- (1) ブルースはバーガーの世俗化論の見直しを「不必要で奇妙な事」として述べ (Bruce 2001:87)、バーガーによる現代多元状況と宗教的信憑性の低下についての分析が正しく、世俗化は世界的に進行してゆくと論じた。
- (2) 山中弘は、バーガーの世俗化論の見直しを「理論的回心」として紹介し、バーガーの自説の撤回が「最近になってからのことではなく、早くも70年代にはその兆候を見せていることは注意して良いだろう」(山中 2004:119) と論じている。
- (3) 森本あんりは、クリスチャンであり長く教会人として生きて来たバーガーの信仰者としての一面が、日本の社会学ではほとんど紹介されておらず、位置づけもなされていないことを指摘している (Berger 2004 [2009]:306)。また三宅威仁も、バーガー研究において社会学のみに焦点が当てられ神学に十分な関心が払われて来なかったことを指摘している (三宅 1995:126)。
- (4) この「神聖さ」の性格がバーガーの説く宗教経験において重要であり、それはオットーやエリアーデの主張に基づいている (Berger 1967:25)。またバーガーの述べる宗教経験は、シュッツの説く「日常世界」に対して「超自然的リアリティ」を示す経験であり、そうした諸経験において独自の「聖性」を示す経験である (Berger 1979:44-46)。
- (5) バーガーは研究の初期から「多元主義」の語を使っているが、その用語使用の基準は曖昧であり、それは時に「多元性」「多元的状况」をも意味していた。ただ後に多元主義 pluralism の語が、アメリカ社会の持つ多様性を祝福する意味を有するイデオロギー的な用語であったことを紹介し、plurality と表現されるべきことを述べている (Berger and Zijderveld 2010:7)。
- (6) ベックフォードは、バーガーの現代多元主義の理解が、①「近代社会」と「前近代社会」の差異の誇張の前提と、②現代の多元的社会にあっても、従来「公」とされて来たものと「私」とされて来たものとの競合関係が存在していることへの鈍感さ、に基づいていることを批判している (Beckford 2003:88)。
- (7) 「true believer」の語に対する「真理信奉者」との訳は筆者によるものである。過去の日本語訳では「忠実なる信仰者」との訳があてられているが、本論文のバーガーの議論において、〈確かさ〉や〈真理〉の探究のありようが議論されていることを鑑みて、「真理信奉者」との訳をあてた。
- (8) アダム・セリグマンは、この概念を宗教伝統の内部にあるクリティカルツールであると述べ、現代人の〈他者〉との関係に対するクリティカルな矯正物であると論じている (Seligman 2004:12)。
- (9) 日本でも神仏混淆的な宗教文化と「国家神道」を以て「市民宗教」とみなし、その〈見直し〉によって現代の規範の動揺に対処しようとする議論が見られる。その議論においては、諸宗教伝統と近現代日本社会それぞれの規範をめぐる齟齬は軽視されがちである。宗教的多元性が意識されず、宗教に対する〈真理〉要請も弱い日本社会において「宗教的ミドルポジション」を考えることは、自明視されがちな政教関係や宗教文

化のあり様への〈疑い〉をもたらすかも知れない。それは、世俗性との関係を新たに宗教伝統の中に探ろうとする信仰者や、その伝統に含まれて来なかったマイノリティの信仰者にとってまず意味があるだろう。また、いわゆるグローバル化の結果、日本社会が多元的状況を呈する様なことがあれば、その重要性は増すだろう。

#### 引用文献

- Beckford, James A., 2003, *Social Theory and Religion*, New York: Cambridge University Press.
- Bellah, Robert N., 1967, "Civil Religion in America," *Daedalus*, winter, 1-21. (=1973, 河合秀和訳「第11章 アメリカの市民宗教」『ベラー 社会変革と宗教倫理』未来社：343-375.)
- Berger, Peter L., 1961, *The Precarious Vision: A Sociologist Looks at Social Fictions and the Christian Faith*, Garden City, N.Y.: Doubleday.
- , 1967, *The Sacred Canopy: Elements of a Sociological Theory of Religion*, Garden City, New York: Anchor Books.
- , 1969, *A Rumor of Angels: Modern Society and the Rediscovery of the Supernatural*, Garden City, N.Y.: A Doubleday/ Anchor Book.
- , 1971, "A Call for Authority in the Christian Community," *The Christian Century*, October 27. Reprinted in: 1977, *Facing Up to Modernity: Excursions in Society, Politics, and Religion*, N.Y.: Basic Books, 182-194.
- , 1974, "Some Second Thoughts on Substantive versus Functional Definitions of Religion," *Journal for the Scientific Study of Religion*, 13 (2) : 125-133.
- , 1979, *The Heretical Imperative: Contemporary Possibilities of Religious Affirmation*, Garden City, N.Y.: Anchor/Doubleday.
- , 1992, *A Far Glory: The Quest for Faith in an Age of Credulity*, N.Y.: Anchor Book.
- , 1998, "Protestantism and the Quest for Certainty," *The Christian Century*, August 26-September 2: 782-796.
- , 2001, "Reflection on the Sociology of Religion Today," *Sociology of Religion*, 62: 443-454.
- , 2004, *Questions of Faith: A Skeptical Affirmation of Christianity*, Oxford, U.K., Blackwell Publishing. (= 2009, 森本あんり・篠原和子訳『現代人はキリスト教を信じられるか——懐疑と信仰のはざままで』教文館.)
- , 2010, "Introduction: Between Relativism and Fundamentalism," Peter L. Berger ed., *Between Relativism and Fundamentalism: Religious Resources for a Middle Position*, Grand Rapids: Eerdmans, 1-16.
- and Thomas Luckmann, 1966, "Secularization and Pluralism," *International Yearbook for the Sociology of Religion*, 2: 73-86.
- and Anton Zijderveld, 2010, *In Praise of Doubt: How to Have Convictions Without Becoming A Fanatic*, N.Y.: Harper One.
- Bruce, Steve, 2001, "The Curious Case of the Unnecessary recantation: Berger and Secularization," Linda Woodhead, Paul Heelas and David Martin eds., *Peter Berger and the Study of Religion*, London, Routledge: 87-100.
- Casanova, Jose, 1994, *Public Religions in the Modern World*, Chicago: The University of Chicago Press.
- Hoffer, Eric, 1951, *The True Believer: Thoughts on the Nature of Mass Movements*, N.Y.: Harper & Brothers. (= 1961,

- 高根正昭訳『大衆』紀伊國屋書店.)
- 三宅威仁, 1995, 「ピーター・L・バーガーにおける社会学から神学への道」『基督教研究』56 (2) : 126-151.
- Seligman, Adam B., 2004, *Modest Claim: dialogues and essays on tolerance and tradition*, Indiana: University of Notre Dame.
- 山中弘, 2004, 「宗教社会学の歴史観」池上良正ほか編『岩波講座 宗教 第3巻 宗教史の可能性』岩波書店 : 107-129.

[学外研究者による査読を含む審査を経て、2014年1月7日掲載決定]  
(一橋大学大学院社会学研究科博士後期課程)